しあわせ荘の日常

五月蓬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しあわせ荘の日常

【Ｎコード】
Ｎ０９５７Ｘ

【作者名】
五月蓬

【あらすじ】
幽霊が見えちゃう新高校生、遠野真（とおのまこと）が守護霊と共に上京してきて暮らす事になったのは『しあわせ荘』！
曰くつきの其処はなんと、妖怪が集まるアパートだった！？
ツンデレ（？）な天邪鬼（あまのじゃく）少女。合法ロリな三十路の座敷わらし管理人さん。日本文化をこよなく愛する留学吸血鬼。人に恋する九尾の狐。

その他色々な変わり者の妖怪達が繰り広げる、非日常系日常ストーリー！

その1『しあわせ荘へようこそ』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その1『しあわせ荘へようこそ』

今年から越戸高校（こしとこうこう）の一員となる彼、遠野真（とおのまこと）は幽霊が見えるごく普通の男子中学生であった（幽霊が見える時点で普通じゃないよね？というツッコミは華麗にスルーである）。

日頃幽霊、『死』という貴重な経験をした人生の大先輩（生きてないのに人生とはこれ如何に）から、諸行無常を常に学んだ真少年は非常に大人びた、というよりもどこか生き急いだ少年であった。

人生いつ終わるか分からない。だからやれることは早くやらねば。

そんな人生観が、彼の進路を決定づけた。

東京は夢の舞台……

日頃、幽霊達の話を聞いて、彼はそんな幻想に囚われていたのだ。一刻も早く、少しでも永く東京で過ごさねば！そんな感情が彼に上京の道を選ばせたのだ。

ちなみに真の両親も『見える人』だ。だから真の気持ちをすぐに理解した。

『刹那に生きろ真ッ！』

半分透き通った真の父の口癖である。

そんなこんなで、なんだかんだで、問題なく成績優秀な真は、学

校から、両親から、後押しされるようにさらりと簡単に東京の高校へと向かったのである。

「多分この辺りだよなあ」
『ぽいな。お、あれじゃね？』

春休み、陽気な昼下がりに真は最低限必要な荷物をキャリーバックで引きずりながら、地図を片手に東京の地を歩いていた。守護霊のヒカル（中々の色男である。しかも強力。真のステータスを底上げしている多才な男だ）と共に、彼（彼らからしたら『彼ら』）がこれから拠点とする東京の城、『しあわせ荘』を探しているところであった。

見えてきたアパートはその『しあわせ荘』というほんわかした名前に似合った淡い色合いの壁面が綺麗な穏やかな印象の、こじんまりとした建物だった。囲う石の塀の空いた場所、その入り口脇には少し雨風にさらされぼろっとした『しあわせ荘』と書かれた木札。その入り口から覗き込み、真はほほうと声をあげた。

「東京なのに金ピカじゃないのか……」
『ちょっ……お前東京を何だと思ってんだよ！』
「東京の住宅は全部金ピカだと日村のじいさんが言ってた」
『ばっか！それは京都だろ！言わせんな恥ずかしい！』

京都もそんな場所ではない。
二人はそんな会話を交わしつつ、一歩、しあわせ荘の砂の敷地に踏み込んだ。

「とても曰くつきには見えないな」
『だが、不動産屋は言ってたぜ？それにこの安さだしな。何もないわけはないだろ』

二人の語るその通りに、実はこのしあわせ荘、曰くつき物件として格安家賃で紹介されたアパートである。
何やら『出る』らしいですよ、との話だった。

まあ、『見える』彼からしたら、ただの格安アパートなのだが。
そんな理由で、「別に高層マンションでもいいのよ？」と、幽霊の加護という名の裏技で金の浴槽に浸かっているような刹那に生きる母の好意をはねのけて、真はこのアパートを選んだのだ。

しかし思いの外、悪霊的な悪い気配はない。

想定外の事態に逆に戸惑う真に、ふとその声は降りかかった。

「あれ？もしかして、今日越してくる遠野さんですかー？」

しあわせ荘の敷地内の色とりどりの花が並ぶ花壇の前で、じょうろ片手に立っているその小さな女の子は、透き通った可愛らしい声で真に向けて手を振った。

くまの刺繍が施された、少し大きめな可愛いエプロンをゆさゆさ揺らしながら、小学校低学年くらいの少女は、やっぱりくまの装飾があるサンダルをピコピコならしながら駆けてくる。

何処かの娘さんかな？

微笑ましいと、真はにっこり笑って、さらに敷地に踏み込んで、腰を曲げて少女に挨拶をした。

「そうだよ。僕、遠野真。よろしくね」

目の前まで寄ってきた少女は、真の挨拶にぱあっと顔を明るくして、真と同じくにっこり笑った。

「初めまして！私、管理人の藁蘂菊子（わらしべきくこ）です！種族は『座敷わらし』です！これから宜しくお願いいますね、真くん！」

……いま、なんて言いましたかねこの子？

管理人？座敷わらし？あ、そういうままごとかな？

真は笑顔を凍り付かせて、固まった。思考停止である。

「えーっと……真くんは種族はなんですかー？一見、人間にしか見えませんけど……」

「はは、そりゃ人間だよー」

真は至って真面目に返したのだが、菊子はあははと笑い出した。

「あはは！真くんは冗談が面白いですねー！ここの噂を聞いてきたなら、妖怪だってまるわかりですよー！」

……妖怪？

尚も首を傾げる真。そんな彼に、状況を理解させたのは、長年の相棒、守護霊のヒカルだった。

『あー！なんが覚えのある気配だと思ったら、そっか、妖怪かあ！おい真、目の前の、妖怪座敷わらしだぜ！珍し！』

真は暫くの間沈黙を保ち、そしてようやく口を開く。

「よ、妖怪～～～！？」

真の叫びが東京に響く。

其処から、真のしあわせ荘での奇妙な東京ライフが始まった。

その1『しあわせ荘へようこそ』（後書き）

はいすみません。こんなの始めちゃいました（―｜―；）
メインで書いてるものがありますので、こちらは完全不定期の気紛れ更新となります。

というのも、最近環境が変わりまして、外出することが増えてきたのです。
携帯からなにか活動したいなあ、と思ったのですが、メインでやってるものは長くて携帯じゃ一苦労。

其処で一話千から三千文字程度の、短めの小話のようなものを息抜きがてらにやってみようと思ったわけです。空いた時間にささっとできるような。

そんなわけで、こちらは完全不定期の気紛れ更新となっております。
本当に空いた時間にしかできません。

そんな気紛れ作品ですので、気軽にお付き合いいただけたらなあと思っております。内容も簡単なので、そのうち用意する人物紹介を読めばどこからでも読めるかもしれません。

さらっと気楽な作品が目標。凝った設定はなし。

それでもよろしかったら是非お付き合いを……

その2　『座敷わらしのきっこさん』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その2　『座敷わらしのきっこさん』

『しあわせ荘』。其処は妖怪が集う場所。

管理人は『座敷わらし』の藁蕊菊子（わらしべきくこ）さん。

「まさか噂を知らないで来ちゃうなんて……びっくりしましたよー」

とっても小さなその女性、見た目は完全に小学校低学年である。とても小さくて童顔。ぴしっと切り揃えた髪がまるで人形のよう。やたらとくまが好きなのか、エプロン、サンダル、じょうろ、手を拭くハンカチ、その身の回りのもの全てが可愛いくまの装飾つき。とにもかくにも本当に見た目は子供である。

しかし驚くことなかれ。菊子さん、こう見えて三十路である。

真もにわかには信じられず、怪訝な表情を見せたが、慣れているのかするりとポケットから取り出した（やっぱりくまのイラスト入りの）財布の中の免許証を見せた菊子さん。どうやら三十歳というのは本当らしい（よく免許とれたものだ。本当にアクセルブレーキ踏めるのだろうか？）。

財布をしまいながら、「よく間違えられるんですよー」とにっこり笑った菊子さん。さらに「座敷わらしの私の家系は代々童顔なんですよー」と菊子さんは言った。

童顔とかいうレベルではない。真は心の奥底にその言葉を封じ込めた。

「『曰くつき』、と言えば大体の人は来ないものなんですよー。そもそも、『曰くつき』という用語自体が『妖怪住宅』の隠語で通ってますからねー」
「そうなんですか。東京ってすごいなー。妖怪が普通に暮らしてるのか」

真はふむふむと感心して頷いた。守護霊ヒカルも『流石は東京』と感心気味である。そしてヒカルは珍しそうにまじまじと座敷わらしの菊子さんを見つめた。

『真。知っているか？「小五」と「ロリ」、二つの文字を足すと『悟り』になる。これはとても有名な方程式だ』
「え？小五とロリ？おお、『小』を左に、『五』と『ロ』を右に、そして最後に『リ』を添えれば『悟り』だ！これはすごい」
『だが、それに手をだした人間は今の時代は犯罪者だ。これは現代人が『悟り』には至れないという皮肉の意味が篭っている』
「そ、そうなのか」

ヒカルの講釈にふむふむと頷く真。ちなみに、二人は声を発していない。守護霊はその憑いている人間と心で会話が出来るのである。だから決して菊子さんの前で『小五ロリの方程式』の話をしている訳ではない。

『だがな、真。『三十路』と『ロリ』だと……どうなる？』
「ご、ごくり……どうなる？」

鬼気迫るヒカルの語りを前に、真はつばを飲み込んだ。

『……それだと犯罪じゃないんだよ！』

「な、なんだってー！」

驚きつつ、真は背後のヒカルに肘打ちした。

『ぐふぅ』

「お前の女好きに付き合うつもりはない」

『ちっ。折角の新属性、合法ロリを……』

「『悟り』のくだり、いらなかったよな」

ちなみにヒカルは無類の女好きである。守備範囲は揺り篭から墓場まで、人間はもちろん幽霊妖怪動物なんでもござれの超広域に及ぶ。自称プレイボーイである。

さて、と。いや、さてでもなんでもないのだが、勝手に話を仕切り直して、真は菊子さんに尋ねる。

「それで人間の僕が入っちゃって大丈夫なんですかね？」

「それは真くんの決めることですよー。私の言う心配は、妖怪と一緒で不安じゃないですか？って心配なのです」

「大丈夫です。慣れてますから」

悪霊とかと取っ組み合いの喧嘩をしたことがあるから、多分妖怪とかでも大丈夫だろうと真は思う。それに菊子さんの穏やかさを見て、妖怪というものを甘く見ている節もある。そして何より、妖怪という東京文化に興味をもったのが大きかった。

「あはは。真くんは面白いですねー」

菊子さんはにっこり笑った。菊というより向日葵である。

「まあ、此処でお話もなんですし、お部屋に行きましょーか！」
「はい」

ピコ、ピコと音を立てて菊子さんは前を行く。なんで子供用の音が鳴るサンダルを履いているのだろうと真はどうでもいい疑問を抱いた。ちなみに何かの伏線だったりはしない。鉄の階段をカンカンピコピコ上がる菊子さんに続き、真は階段を登る。気のせいか、階段の感覚が狭い。菊子さん基準？

「まっことくんのおっへや～はにぃまるごぉ～♪にぃ～まるごぉ～の～まっこぉとくぅん♪」
「なんですかその歌」
「えへへ～」

とてもこの人が大人には見えないのは気のせいだろうか？と真は謎の歌を口吟む菊子さんに疑わしい目を向けた。

階段を上がると２０１号室がある。そこから奥へ向かうにつれて、部屋は２０２、２０３と連なっていき、端っこは２０６号室。つまり、奥から二番目の部屋が真の部屋となる。

がちゃり。

２０１号室を通り過ぎた頃、２０２号室の扉が開いた。

『おお』

ヒカルが感嘆の声を漏らす。がちゃりと鍵を閉めて出てきたのは長い金髪を垂らすびっくりする程に色白な女性。何故か巫女のよう

な装束を纏っている。女性は真もびっくりする程綺麗だった。

「おー、きっこ。どした？」

「しろさんこんにちは。新しい入居者さんですよー」

「そか。ちと出かけるでな。急ぎじゃて、挨拶はまたの」

若い女性はちらりと真と目を合わせ、微笑を浮かべると、三十路の菊子さんの頭をぽんぽんと撫でて、そそくさと階段を降りていった。

にこにこ手を降っている菊子さんに真は尋ねる。

「きっこさんってなんですか？あだ名ですか？」

「はい、そうですよー。『きくこ』って言いづらいじゃないですかー？きくこきくこきくこくきくこきき……えへへ～。よく噛んじゃうんですよね～」

「自分の名前噛むんですか？」

「はい。真くんの時は成功しましたけど、いまのしろさんの時は噛んじゃって……それから『きっこ』って呼ばれてます。真くんもそう呼んでいいですよー？」

「はい菊子さん」

真は普通にそう呼んだ。悪戯のつもりもなく。しかし菊子さんはしょんぼりしてしまう。

「……きっこさん」

「はい！」

ぱあっと向日葵が帰ってきた。まるで子供である。

再び歩を進めると、タイミングよく開く２０３。出て来たのは学

生服の少年。その幼顔の割には背が相当高い。少なくとも真以上である。きっこさんと並ぶと父と娘のようだ。

「あ、きっこさんこんにちは……」
「だいくんこんにちはー。おー出かーけでーすかー？」
「はい。部活なんで……」

でかい少年は軽く目を伏せ（真から目を逸らして？）横を通り過ぎる。通り過ぎ様にきっこさんの頭を撫でて。

「……」
「いってらっさーい！」

舌っ足らずのきっこさんのお見送り。それを見ながら真は思う。

なんでみんなきっこさんの頭撫でてくん……？

扱いがまるで子供である。

「あー、だいくんはちょっとぶっきょうだけど仲良くしてあげてくださいね？」
「仏教？」
『不器用じゃね？』
「だ、だよな。いきなり仏教徒がでてくるわけないよな」
「真くん？」
「あ、はい大丈夫です」

「良かったー♪」

嬉しそうに笑い、きっこさんはピコピコ歩く。今度は部屋から誰も出て来ず、やっと２０５号室。

「ここですよー」

エプロンのポケットからぶっきょうに鍵をあたふた取り出して、がちゃりとその扉を開くきっこさん。

そこそこ広く、そこそこ小綺麗な部屋が姿を現した。

「毎日お掃除してましたので綺麗でしょ？お荷物はそれだけですか？」

「あとでまた届きます」

「そうですかー。じゃ、とりあえず何かあったら言ってくださいねー」

よいよいと真を部屋に押し込み、きっこさんは笑う。

真は振り向き、入り口前に立つきっこさんを見た。

「はい。ありがとうございます」

そう言いつつ、真はきっこさんの頭を撫でた。

……年上に何してんだ俺！？

ノリでやらかしちまった真はあたふた慌てて謝罪する。

「ご、ごめんなさ」

言い掛けて、真は満足げに微笑むきっこさんに気付く。きっこさんは嬉しそうに撫でられた辺りをさすりながら、ピコピコスキップで去っていった。

「……子供かっ」

管理人さんである。

その2　『座敷わらしのきっこさん』（後書き）

～本日の現代妖怪辞典～

【座敷わらし】

幸せを運ぶ見た目子供な妖怪さん。歳をとっても見た目が子供な童顔種族。かつては人間に有難がられたが、気付けば感謝も少なくなってすっかり独立。幸せ妖怪だけあって、お金回しはお手の物。指先一つで億万長者な座敷わらしも結構多い。悪戯好きだったりもするけど、基本的には子供のように純粋。でも、最近腹黒な子も多いとか。時代の流れって怖いですね。

※これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の座敷わらしはこんなんじゃないよ！

座敷わらしのきっこさん。格安で妖怪に住居を提供する優しい管理人さん。頭を撫でれば喜びます。

その３　『天邪鬼の瓜子さん』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その3　『天邪鬼の瓜子さん』

取り敢えず荷物を置いて、真はふむ、と胡座をかいて腕を組む。

「さて、これからどうしたものか」

『荷物整理は？』

「いや、それはぱぱっと終わらせるが、問題はアレだ」

『あれ？』

「ご近所挨拶だ」

真は生まれてこの方引っ越しなどしたことがなかった。ちなみに彼の両親も同様である。故にその時の勝手がいまいち分からない。

「どうしたものか」

『適当にアパートの部屋全部回ればいいんじゃね？大した数もないし。それでよろしく～とでも言っとけ』

「それでいいのか？」

『それでいいんだよ』

「何か粗品でも持ってかなくていいのか？失礼じゃないか？」

『失礼じゃねーっての。いいか？こういうのが人付き合いのテクってもんよ。こういうのは物なんて持たないで回るんだよ。その時に笑顔でよろしくと返してくれる人は良い奴だ。積極的に付き合え。この時に『土産もねーのかコノヤロー』みたいな顔をするのは嫌な奴だ。そいつからは嫌われて丁度いい。付き合うな』

守護霊ヒカルの不安残るアドバイス。真は疑わしい目を背後に向

ける。

「そんなの許されるのか？感じ悪くないか？」

『大丈夫大丈夫。俺を信じろ』

ヒカルは適当にそう言った。ちなみになんの根拠もないことなのは、ヒカルの胸の中にだけある秘密である。しかし、まぁ、こんな守護霊でも、恩恵を大いに受ける真にとっては大きな存在。彼はまんま彼の言葉を信じる事にした。実際に騙されながらも自体が良い方に転がる事が多いのが尚更彼の信頼を築いていた。

「よし。じゃあ、荷物が届く前にぱぱっと挨拶行くかー」

『いけいけー』

適当なヒカルの後押しを受けて、真はよっこいしょういちと腰を上げる。ちなみにヒカルの人付き合いテクニックはなんの根拠もないことなので、間に受けていけません。正しい礼儀作法は、しっかりとした大人の人に聞きましょう。

真とヒカルは２０５号室の扉を出る。そこできっこさんから鍵を貰ってないことに気付く。しかし、まぁ挨拶がてらに行けば良かろうといった軽い感覚で部屋をそのまま出る。挨拶回りなので、其処まで時間を取らないだろうという算段だ。

そして二人は、まずはお隣、二階の端っこ２０６号室のインターホンを鳴らす。しかし、反応は無い。留守なのだろうか、と二人はすぐさま諦めて、２０４号室へと向かう。実際に既に２０２号室と２０３号室が留守なのは分かっている。まあ、みんな暇ではないのだろうと特段不自然には思わない。

続いてお隣２０４号室。ヒカルの『お隣さんは多少丁寧にな』という助言をしっかり受けて、大してコミュニケーション嫌いでもないそこそこフレンドリーな真は躊躇いもなくインターホンをぽちっと押した。ぴんぽーん。

がちゃり。はい。どちら様でしょうか。

「隣に越してきた遠野です。ご挨拶に参りましたでござる」
『おい真！ござるはやめろ！』
「え？東京の標準語ってこうじゃないのか？」
『あれは冗談で言ったんだ！間にうけんな！』
「おい、どうすんだ。もう言っちゃったぞ」
『……誤魔化せ！』

このやり取り、僅か０．２秒。なんで変身中に攻撃されないの？という仮面ラ〇ダー理論である。

「ご、ござそうろう……」
『誤魔化せてない！』

は、はい……今出ます……

「……おい、若干引いてるぞ！お前のせいだ！」
『お前が馬鹿なのが悪い！』

がちゃり、と扉が開く。インターホン側には『天野瓜子（あまのうりこ）』と名前が書かれていた。女性の一人暮らしらしい。

顔を覗かせたのはひとりの少女。見た目、真と同い年くらいの女の子だ。

「……」

無言である。黒いセミロングヘア、化粧もしてない飾りっけのない女の子。じろりと睨むその瞳は鋭く気の強そうな印象を与える。扉の僅かな隙間から見える僅かな情報である。まるで警戒するかのように、女の子は扉を僅かに開いてじろりと目を光らせていた。

「あ、あのー。こんにちは。遠野真です。今年から高校一年になります。よろしく」

真は年が近いと予想してか、少し柔らかく挨拶した。すると女の子はぎらりと目を光らせて、バタン！と勢い良く扉を開いた。

「べ、別に年が同じで、しかも同じ高校に通うことになる子が隣に越してくると知ってたから、友達になれないかなぁ、とか、ワクワクしてたわけじゃないんだからっ！」

……な、何を言っているんだこの娘は？

真はごくりと息を呑んだ。

ばっと姿を現したのは、びしっと制服を着こなした女の子。セミロングヘアのてっぺんには、なぜかちょんまげのようにゴムで纏めた毛がぴょんと立っている。結構細身、スレンダー。ヒカルはやっぱり『おお』と声を漏らした。

『いいじゃないか。ちっと芋臭いが、いいじゃないか。スカートとニーソの間の絶対領域がいいじゃないか』

「なんでこの人は制服を着てる？それになんでかお前が来ることなど楽しみではなかったみたいな宣戦布告をされたぞ」
『ふっ。分かってないな真。これはあれだ。「ツンデレ」だよ』
「つんでれ？それも東京文化か？」
『ああ。東京文化だ』

なるほど。東京では出会い頭に宣戦布告をするのか。と真はふむ、と頷く。東京文化はよく分からない。

「ご期待に添えずに申し訳ありません」
「え？え？べ、別にそういうつもりで言ったんじゃないけどっ！ま、まぁ仲良くするのはまんざらでもないかな～なんて……」
「え？仲良くしてくれるんですか？」
「仕方ないからだけどっ！」

何故、この娘はやたらと此方の言うことに何かこころなしか逆らっているのか？嫌われた？と真は少ししょんぼりする。

「あ。真くーん。そういえば鍵渡し忘れて……あれ？」

ドアの前に立つ真に、鍵をちゃりちゃり言わせながら、ピコピコとやってくるのは管理人のきっこさん。きっこさんはドアの前に仁王立ちする女の子を見て、にっこり笑った。

「あー、瓜子（うりこ）ちゃん、早速真くんと仲良くしてるんですねー。よかったー」
「き、きっこさん！？べ、別にいきなり馴れ合うつもりなんてないけどっ！」
「真くん、瓜子ちゃんは天邪鬼（あまのじゃく）さんだから素直じゃないけど、とってもいい子ですよー。仲良くしてあげてくださいね？」

「天邪鬼？」

それも妖怪なのか？というより、このアパートの住人が妖怪ばかりだと今更思い出した真。余りにも人間っぽい人ばかりなので忘れていた。

目の前の普通の少女が妖怪？天邪鬼？なんだそれ？そんな感じで首をかしげる真に、ヒカルの助け舟。

『天邪鬼ってのは要はツンデレ妖怪だよ。なんでも反対の事を言いたがる捻くれものだ』

「そうか。さっきから言ってるのは習性なのか」

勝手に納得して、真はほっと一安心した。ちなみに天邪鬼はツンデレではない。ツンデレの定義はその手の道の人に聞いてみよう。

「まぁ、でも良かったよ。同じ学校の人が近くにいて。東京に来たばっかりで不安だったからさ。迷惑かけるかもしれないけど、よろしく。良かったら友達になってくれないかな～、なんて。迷惑かな？」

真は頭を下げる。すると、瓜子はむうと口をへの字に曲げて、胸をぐいっと逸らしてみせる。

「迷惑なんかじゃないけどっ！と、友達は居たって困らないでしょ！」

瓜子はぽわっと頬を赤くしてふんと鼻を鳴らした。素直じゃないというか、何かよく分からない子である。しかし、悪い子ではないな、と真はほっと一安心して微笑んだ。

「これからよろしく」
「よ、よろしく」
「じゃあ、僕、これから挨拶回りに行くんでこれで」
「え？もう行っちゃうの？」
「ん？」
「え、う、ううん。なんでもない……」
「じゃあ、また後で」

真はひらひらと手を振って、きっこさんと話しながら２０４号を離れていく。ぽかんとドアの前に立ち、それを見送った瓜子はばたりとドアを閉じ、背中を寄りかけむすっと口を尖らせた。

わざわざ同じ高校アピールの為、どんな格好が恥ずかしくないか分からないので越戸高校の制服を着込んだ。胸ポケットから会話の内容を予想して纏めたメモ帳を取り出しパラパラ捲る。一切、記載した台本の台詞を言えなかった。

部屋の奥、ちゃぶ台に置いたお菓子。沸かしておいたお湯。それら全てに意識をまわし、へたりと瓜子はしゃがみこむ。

「お茶くらい飲んでけばいいのに……」

しかし素直にそうは言えないのが妖怪天邪鬼なのである。

その3　『天邪鬼の瓜子さん』（後書き）

～本日の現代妖怪辞典～

【天邪鬼】

何にでも逆らうツンデレ（？）な妖怪さん。鬼なので角が生えているようです。でも、最近は角も退化してきた天邪鬼もいるとか？何かと人と反対の意見を言うし、素直な気持ちを言えないので誤解されがち。だけれど基本、純粋な人（鬼？）が多いのです。鬼だから勿論腕っ節は強い。そして人を引き込む妙な魅力が能力だそう。その本心でない言葉に乗って、失敗する人もいるとかいないとか。でもそれは自分の責任ですよね。自分の意思はしっかり持ちましょう。

※これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の天邪鬼はこんなんじゃないよ！

天邪鬼の瓜子さん。少し素直じゃないけれど、本当は優しい良い子ですよ。一人暮らしの新高校生です。

その４　『吸血鬼のシャルル氏』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その４　『吸血鬼のシャルル氏』

２０４号室の挨拶を終えて、一応２０３、２０２とインターホンを鳴らしてみる。しかし、やはりしろさん、だいくんという二人の住人が出て行った部屋は留守らしい。どちらも一人暮らしかと、ふむと勝手に納得する。

仕方ないなと真が次に向かうのは２０１号室。二階の最後の部屋である。

「え、英語？ちゃ、ちゃーるず……んん？ヒカル、読める？」

『無理』

何と名前は英語？らしい。外国人さんかと真とヒカルはごくりと息をのむ。ちなみに二人とも日本人。英語とかは、教科書英語しか分からない人達である。日本の英語教育は全く……英会話のが重要だろうよ！と、道で出会った外国人さんに話しかけられて答えられないと、国の教育のせいにしちゃう程度に英語とか話せない人である。

に、日本語通じるかなぁと不安になる真。ちなみに鍵を渡して満足したのかきっこさんはとっとと降りて行った。ちゃんと別れ際のいい子いい子は忘れていない。

「……と、とにかくやるっきゃない！」

『おお！お前勇者か！』

「大丈夫！ボディランゲージでいける筈！」

『通用しないって歌ってる歌があったな』
「い、いいからいくぞ！多分、日本に住んでるから多少はいける筈！」

真は意を決してインターホンを鳴らす。

ぴんぽーん。

ハーイ、どちら様デスカー？

片言だが日本語である。真は少しだけほっとして声を発する。

「今日２０５号室に越してきた遠野です」

アー、チョト、待っててクダサイネー！

がちゃり。

どどどどどど。

ギィ。

ドアが開いた。姿を見せたのは、やっぱりパツキンの男性だ。何やら整髪料で髪をオールバックで固めており、色は白い。中々凛々しい顔立ち、高身長のスタイル抜群。しかしそんな事よりも特徴的なのは、その真っ赤な瞳と何故か着る青い浴衣。何故、浴衣？お祭り気分？

「ハーイ！ハジメマシテー！ワターシ、シャルル言いマス！『Ｃｈａｒｌｅｓ　Ｃｈｅｖａｌｉｅｒ』。シャルルと呼んで下サーイ！」

チャールズじゃなかったのか……と一安心の真。かなりフレンドリーな印象のシャルルに、真はほっと一息ついて挨拶した。

「遠野真です。今後ともよろしくお願いします」

お辞儀。すると、「オーウ！」と拍手するシャルル。

「イッツ、ジャパニーズ、ドゲザ！」

「ど、土下座じゃないよ！お辞儀だよ！」

「ハーイ！ハクシュ、ハクシュー！」

「あ、は、はい……」

手のひらを前に差し出したシャルルに、戸惑いながらも真は手を叩く。

ぱちぱち。

「ノンノン！それはアクシュ、ネ！ハクシュー！」

あれ？と真。この人、握手と拍手間違えてないか？と一応手を前にだす。するとギュッと手を握り、シャルルはブンブン手を振った。

「ヨロシュー！マコト！」

「よ、宜しくお願いします……シャルルさん」

「ノンノン！シャルルでおk！」

フレンドリーだけど、漫画に出て来るエセ外人のようでなんか喋り辛い人である。

「ワターシ、ニッポン文化に興味シンシンで留学してきマーシタ！ゼヒ、知らない事あったら御教授願いたいデス！」
「留学？おいくつですか？」
「イターチ！大学生デス！」
「二十歳？」
「そう！ハターチ！早速の御教授、感謝デス！」

少し話し辛いが、しかし話し易いとも真は思う。親しげにドンドン話題を振るタイプ。言葉が不自由でも、慣れれば良い付き合いができそうだ。

「ニッポン文化イイですヨネー！このユタカもチョベリグデース！」
「浴衣、ですよ」
「ソウ！ユカタ！」

何だか付き合いのコツを覚えてきた真。ついでに浴衣の謎も解けた。
単に日本好きなだけだ。

変なコスプレで街に繰り出そうとした時は止めてあげよう、と真はどうでもいい決心をした。

ところで気になるもう一つの謎。

シャルルはなんの妖怪なのか？

赤い眼に金髪、すらりとした長身、きりりとした顔立ち。喋らなければ絶対モテる。これが妖怪としての彼の特徴なのだろうか？そ

れより海外に妖怪っているのだろうか？

純粋に気になり、真は親しげに尋ねる。

「シャルルはなんの妖怪なんだ？」

「ヴァンパイア！『吸血鬼』、と言ったらイイんデショーカ？」

真は自分も名前をよく知るその種族におお、と驚いた。吸血鬼、その響きにロマンのようなものを感じる真である。

まあ、目の前の浴衣姿の吸血鬼に多少幻滅はしたが。イメージぶち壊しである。

そんなロマンを目の前に、真は多少ワクワク質問した。

「血とか吸うの？首筋がぶりと」

「大概レバーとか喰ってます」

がっかりである。

レバー喰ってる吸血鬼、なんかがっかりである。まあ、血を吸う人が近隣住民というのも嫌だが。

そんな感じで微妙な表情を浮かべる真に、シャルルははぁと溜め息をつく。そして不満げに語り出した。

「マコート……君が吸血鬼にナニを期待してるのかは分からへんケドも、勝手なイメイジを押し付けないで下サーイ」

シャルルに注意された真は思った。

（分からへん……？関西弁？）

あんまり真面目に聞いてなかった。

「ワターシだって、血を見ればクラッとシマース。夜十時には眠くなるし、毎朝講義がある時は五時起きデース。なのにナンデ勝手に『吸血鬼は夜の眷属』みたいなイメイジ押し付けトンねん」

（がっかりな上に……何故エセ関西弁？）

真はあんまり注意が耳に入らなかった。

「いいデスか？勝手なイメイジの押し付け、ヨクナイ！吸血鬼は、ニッポンみたいに、スシ、ニンジャ、サムラーイでは語れないのデース！」

真は思った。

（あんたのも勝手なイメージじゃねーか！）

ヒカルが言った。

『おい！萌えが抜けてるぞ！』

「お前も黙っとけ！」

最後にシャルルが言った。

「……全部ウソデース！」

「おい！」

真は突っ込んだ。

「だから、夜中にちょっと血を吸わせてもらいにいくかも知れませんのでヨロシクー！」

「……え？」

シャルルはバタンと扉を閉めた。

あとで「あれウソデース。イッツァジャパニーズジョーク！現代吸血鬼は血とかあんまり吸いませーン！」と言いながら、部屋にシャルルが尋ねてきたのは、真がニンニクをスーパーで買ってきたあとのことである。

真は無言で買ってきたおろしニンニクをシャルルの目にぶち込んだ。

悶えるシャルルを見て、真は確認した。

「ニンニクは吸血鬼に有効、と」

多分、その攻撃は誰にでも有効である。よい子は真似しちゃいけない。二人が仲良しだから許されるのだ。いや、仲良しでも許されない。

要はよい子も悪い子も真似しちゃいけないよ♪

その４　『吸血鬼のシャルル氏』（後書き）

～本日の現代妖怪辞典～

【吸血鬼】

毎度お馴染みの西洋妖怪。夜の眷属、血を吸う悪魔、昔からよく知られる大妖怪。しかし今ではすっかり落ち着き、血を飲まなくても、日光があっても、流水があっても怖くない。弱点が大分そげ落ちました。現代の医療は凄いのです。でも個性が欠けて、代わりに貧血気味な人間みたいになりました。それでもやっぱり力持ち、なかには変わった力を持つ者も？血を吸うと本性を表す吸血鬼も居るとか。やはり腐っても大妖怪。いえいえ腐ってませんけど。

※これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の吸血鬼はこんなんじゃないよ！

吸血鬼のシャルル氏。エセ外国人の不思議さんです。ちなみに、英語っぽいこと話してますが、名前はフランス語読みです。ニンニクは臭くて駄目で、十字架は先っぽが尖っているから怖いそうです。先端恐怖症です。吸血鬼あんまり関係ないですね。

しばらくは登場人物紹介的展開。でも、そのしばらく内に住人全員が出るわけではないですね。

その5　『鬼火のリンさん』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その５　『鬼火のリンさん』

二階の挨拶も大概終了。今は留守の家には後に回るとして、真ｗｉｔｈ守護霊はアンパン男のマーチを口ずさみながら階段を降りる。

そこで大体気付いたのだが、この『しあわせ荘』、案外空きがあるようで……一階にはきっこさんを含め、６つの部屋中３つしか埋まっていない（なんで二階は５つ埋まってるのに）。これじゃまるで新メンバーフラグ……げふんげふん、兎に角、思いの外すぐに挨拶が終わりそうだ。しかも春休みの真っ昼間。社会人やらは留守にしているようで、１０２の白川雪江さんは居なかった。

取り敢えず１０１のきっこさんはよしとして、残るは１０３の鬼灯（ほおずき）リンさんだ。

ドアの内から音がする。どうやら御在宅の様子。

『また女だ。やったな！』

「やってない。別に嬉しいのはお前だけだろ」

ふんふん鼻息を鳴らす背後霊……じゃなくて守護霊のヒカルに呆れ顔の一瞥を送ると、真はインターホンをプッシュする。

ぴんぽーん。

はいよー。

「今日、２０５に越してきた遠野です」

あ？　あー。分かった分かった。ちょっくし待ってろー。

随分と男っぽい、というか荒い口調だ。どんな人なのだろうか。

がちゃり、とドアが開く。

「おお、何だ子供かぁ」

顔を出したのは、言葉のとおり子供ではない大人の女性である。

ぼさぼさの赤毛にぼんやりと赤い半開きの目。だらしなく弛れた赤いジャージを上下で着こなし（着こなしという程立派ではないかも）、そのやる気のなさやだらしなさを遺憾無く表現しているかのような見事なファッションである。

全体的な印象は、赤い、だらしない。部屋の奥が酷く散らかっている所もだらしない。とにかくだらしない。

「おっと、自己紹介がまだだった。あたしは鬼灯（ほおずき）リン。見ての通りの妖怪、鬼火（おにび）だ。職業はきっこの家事手伝い。決して無職のプーではないので誤解の無いよう」

成程。何でこんな平日から家に居るのかと思ったら、無職のプー

だったのか。真とヒカルは妙に納得した。
まあ、それは置いておいてだ。その妖怪種族名、鬼火に今度は興味が向いた真とヒカル。

「鬼火？」
「おっと。興味あるなら話してやるけど、まずは自己紹介。な？」
「あ、はい。すみません」

礼儀にうるさいけど見た目はだらしない。

「遠野真です。よろしくお願いします」
「おお、よろしくー。困ったコトがあったら何時でも言えよなー。相談に乗ってやっからよ」
「ありがとうございます」
「おお、いいねえ。礼儀正しい奴は嫌いじゃねー」

ジャージのポケットからタバコの箱を取り出して、一本をくわえるリン。そして、その指先をタバコの先に当てると、タバコはぼっと発火した。

「おお」
「ん？　ああ、火が何で点いたかって？　ふふん、別に手品でもなんでもないぜ？　なんたってあたしは鬼火。そりゃあ火だって点けれるさ」

鬼火、というと、真がまっ先に思い浮かべたのは墓場に浮かぶ人魂。真もよく見るものである。あれって妖怪だったのか？と真はむむと口を曲げる。

「ん？　鬼火に見えないって思ってるか？　まあ、現代妖怪なんて

人間社会に溶け込む奴ばっかりさ。人間の姿を取れなきゃ生活もままならねーし、馴染めなきゃ生きてけねーよ」

多分此処で「リンさんは馴染んでいるんですか？」と聞いたら怒られるだろう。

「まあ、鬼火の姿にも化けられるけど……ただのふよふよ浮かぶ火の玉だ。見ても面白そうじゃないだろ？」

「はあ」

タバコを蒸す鬼火は、かっかと笑った。まあ、本人が鬼火と言っているんだし、鬼火なのだろう。

「ところで真。挨拶は大体済ませたのか？」

「いいえ。結構留守の部屋が多くて。２０２、２０３、１０２はまだです」

「おうそっかそっか。２０２は絶対行っとけ。丁寧に挨拶もするといい。ここらで一番の大御所だ。『九尾の狐』っつったら聞き覚えがあんだろ？　怒らせたら怖いぜ。ま、余程の事がない限りは怒らないけどな。そんなに頻繁に怒られちゃあ、ここら一帯スグに焦土だ。はは」

真が思い出すのは、金髪色白の、巫女服姿の綺麗なお姉さん。あの人は九尾の狐って妖怪なのか。成程、思わぬ情報を手に入れた。リンさんは、意外と頼りになるお姉さんのようである。それにしても九尾の狐、怖そうな人（妖怪？）だ。そうは見えなかったが、気をつけよう。

ふむ、と記憶のページを更新する真に、リンは、びしっと指を立てて、更なる情報を提供する。

「あと、１０２。この隣の女。あいつはあんまり相手にしなくていいぞ。あいつは滅茶苦茶性格悪い女だからな。雪女の雪江ってんだ。芸のねえ名前だろ？」

雪女で雪江。とても覚えやすいではありませんか。しかし、性格悪いとはこれ如何に。

「嫌味な奴なんだよ。人のこと何かと馬鹿にしやがる。正社員だか知らねーが、人間仕事の善し悪しじゃあ価値は決まらねーだろ？」

人間じゃなくて妖怪じゃないですか。そんなツッコミを真が飲み込む程に、リンはめらめら燃えていた。リアルに。しっかりと鬼火として発火していた。

「ちょ……リンさん、燃えてる！燃えてる！」

「……あいつはいっつもムカツクんだ……昔からそうだ。小学校の頃も少し成績がいいくらいでよお……小学校の頃はあたしのが友達多かったんだぜ？　中学、高校、ホンットにずっとずっと面倒くせえやつなんだ」

「家事になります！家事になります！警報が危ない！」

「失恋ばっかしてるくせによお、懲りずになんども恋する馬鹿なやつなんだぜ。失恋の度に慰めるこっちの身にもなれっての！」

「リンさん！」

燃え上がる鬼火、鬼灯リン。雪女の雪江に対する謎の怒りで、しあわせ荘が危ない！

「こら、リンちゃん！！」

そのとき、可愛らしい子供の声が響く。

「きっこさん！」

登場したのは、じょうろ片手に駆けつけた、座敷わらしの管理人さん、きっこさん。いやいや、じょうろで鎮火は無理ですよ。

きっこさんは足をぱたぱたピコピコさせながら、その怒っているのか分からない怒声をあげた。

「何度いえば分かるんですかっ！　落ち着かないとお家賃請求しちゃいますよっ！」

じょうろでは鎮火はできない。しかし、その一言は、一瞬でリンさんの怒りを沈下し、たちまちその顔を青ざめさせた。

「ちょ、ちょっと待ってくれよきっこ。冗談きついぜ全く。ほら、家事手伝いの給料から、家賃は差し引いてるじゃん。な？」

「もう許しませんっ！」

「ごめん！　ごめん！　な！？　ほら、今度前気に入ってた杏仁豆腐作ってやるから！　な！？」

必死である。食べ物で釣ろうとしている。しかも、本気で自称、家事手伝いで家賃払ってないんだ。

流石にきっこさんも見た目は子供でも大人だ。そんな子供騙しの釣りでは引くまい。いや、子供でも騙されない。

「むむ～。じゃあ今回は見逃してあげますっ！」

釣られんのかよっ！

「それじゃあもう絶対に放火とかしないでくださいよっ！」

「ははは。もうしないって！」

撫で撫でときっこさんの頭を撫でて、リンはごまかす。

「じゃあ、今日の晩御飯になー」

一頻り撫でられて満足した様子のきっこさんは（勿論、真も撫で撫では忘れない）、とことこピコピコ１０１号室に戻っていく。

それを見送り、ふうと胸を撫でおろして、リンは一言。

「……と、まあ、こういうことだ」

成程。つまりそういうことか。

その5　『鬼火のリンさん』（後書き）

～本日の現代妖怪辞典～

【鬼火（おにび）】

夜に浮かび上がる火の玉妖怪。色は赤に青、その他様々。人間に化けると、炎の色がその姿に反映されるとか。一時期、化学現象扱いされて、とても焦った種族の一つ。妖怪だよ！　リンの発火じゃないよ！　火は昔から畏怖の対象。だから鬼火も畏怖の対象。でも、狐火と呼ばれたりもして、何だか下級妖怪扱いされがち。火球だけにね！

※これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の鬼火はこんなんじゃないよ！

鬼火で無職のプー、自称、家事手伝いの鬼灯リンさん。家事手伝いの腕は確か。得意料理は中華全般。中華は火力だ！　頼りないようでいざというときは頼りになる、姉御肌のお姉さんです。

その６　『荷物を運ぼう』（前書き）

今回は新しい住人紹介ではありません

その６　『荷物を運ぼう』

挨拶を終えた→荷物がきた→荷物運ぶぞ→手伝ってやろう↑今ココ

以上、簡単な現在のシチュエーションである。
手伝ってくれるのは以下の方々だ。

「たまには運動しなくちゃと思っただけだからっ！」

あくまで善意を否定する瓜子さん。

「力仕事は任せな！」

燃えている（ファイヤー的意味）リンさん。

早速女性二人とお近付きだぜひゃっほう！　……と喜ぶ程、真は異性との交流には飢えていない。

「ありがとうございます」

お礼を言いつつ真顔である。

ちなみに今、しあわせ荘に居る他の二人、吸血鬼のシャルルと座敷わらしのきっこさんは手伝いメンバーにいない。

きっこさんは面のベンチでお昼寝中。子供だし仕方ない。

シャルルは家のドアをお札で封印して封じ込めた。真的には吸血とかマジ勘弁。ちなみにシャルルの冗談の誤解はまだ解けてない時の事である。ダシテクダサーイ！という叫びが聞こえる。しらんぷりである。

何はともあれ、荷物運びに思わぬ助けを得た真は、正直一人でも大丈夫だったのだがありがたく話を受けたのである。

すぐに後悔した。

「なあ！　エロ本とかないか？　エロ本とか！」

運んできたダンボールを早速開封し、頭を突っ込んでいるリンさん。発想が完全にアレである。この人、善意で手伝いに来た訳ではない。興味本位で手伝いに来たのだ。

「ありませんよ」

「つまんないな、オイ！」

真は突っ掛ってくるリンさんを見ないふり聞かないふりで無視しつつ、自分もせっせと荷物を運ぶ。箱を開けるのはあとだろうが。

箱を必死で漁るリンさん。しかし、見られて困るものもないので、真はスルーし作業を続けていた。
一方の瓜子さん。彼女は意外と真面目に働いてくれている。

「この箱は何処に置けばいいの？」
「あ、それはそっちの部屋に……」
「別にあんたの為にやってるわけじゃないんだからねっ！」

いちいち面倒臭いが。

荷物を漁っていて、むしろ邪魔なリンさん。働いてはくれるものの、何だか突っ掛ってくる瓜子さん。
妖怪って不思議だなぁ、と真は勝手に納得して頷いた。

しかし、妖怪というものはやっぱり不思議なもので。面倒な二人ではあったが、その怪力とも言うべき力には真も守護霊のヒカルも驚かされた。
どこか逞しそうなリンさんはともかく、普通の女の子、むしろ華奢な瓜子さんまで真が腕で持ったら一個が限界のダンボールを、二、三つ纏めて持ち上げられる。リンさん曰く、「瓜子はこれでも鬼だから」だそうだ。鬼は結構力持ちらしい。
そういって、リンさんは五個積み上げて運んだ荷物を、ドアの上にぶつけて崩した。皿が割れた。

そんなこんなで、邪魔者ひとりに、ひねくれ天邪鬼の有難い力を借りつつ、荷物運びも終盤。真は気付かなかったが、彼の荷物、人からすれば結構多いようだ。

ちなみにこれは、幽霊が見えちゃう体質の真だからこその問題であることは、本人も気付いていない。ちょっとした幽霊関連グッズはかさばるのだ。

「うおっ！　これ、すげえ！」

荷物運び終盤、そんな時に響く声。なんだ今度は、と真はダンボールに顔を突っ込んだまま声を上げるリンさんの方に向かう。ぎゃー、と叫び声を上げるリンさんは、頭を引っこ抜いて一冊のアルバムを取り出した。

変な写真あっただろうか？

真は不思議に思いながら尋ねる。

「何かありました？」
「これっ！　これやべぇよ！」
「何かあったんですか、リンさん？」

瓜子さんも駆けつけてきた。リンさんは、珍しく顔を青くして、その写真を指さした。

「ああ、友達ととった写真ですけど……何かあります？」
「この写真が何か……あ」

瓜子さんも何か気づいたようで、口を塞いで顔を青くした。真はますます首を傾げる。

「何もおかしいところないじゃないですか」
「お前……ばっかか！？　お前の目は節穴か！？　これ見ろ！　よ

く見ろ！」

リンさんが、あわあわしながら写真を指さす。指差したのは、真の友達、弘さんと花子さん、清兵衛さんにマルコさん。びしびしと、片っ端から真の友達を指さす。指をさされなかったのは真と真の幼馴染の玲（れい）だけである。

「それがどうしたんですか」

ごくりと息を呑んで、リンさんは声を上げた。

「だってこれ、透けてるじゃねーか！！　心霊写真だ！　心霊写真！！」

それと同時に、顔を覆って瓜子さんも声を上げた。

「やめてくださいリンさん！　寝れなくなっちゃう！」

「うわあああ！　やべえ！　初めて見た！　こええ！　こんなにはっきり写るのかよ！」

「うわあああん！　怖いいいい！」

涙目で喚く妖怪女子二人。

真は不思議そうに首を傾げた。

妖怪って幽霊とか見えんのか？

『それが特殊ケースだとお前は知ったほうがいい』

「そうなのか。心得た」

ヒカルの有難い世間常識を受け止めて、真はうずくまってアルバムを放り出している二人の妖怪をまじまじと見つめた。

「お焚き上げだ、お焚き上げ！　神社持ってたほうがいい！　ほら、瓜子！　持ってけ！」

「やです！　触ったら呪われるっ！」

「呪っ……！？　あたし、触っちゃったぞっ！！」

「お祓いに行った方がいいですよ！！」

わーわー、きゃーきゃー……

「なんの騒ぎですか！？」

「あ、きっこ！　やべえ、やべえよ！　これ見ろ！」

「え？　その写真がどうしたんです……ひゃあっ！」

「怖い怖い怖い怖い怖い！」

庭で寝ていたきっこさんも飛んできた。そして写真を見た途端に大騒ぎ。

ナニゴトデスカー！と響くシャルルの声に耳を傾けつつ、真とヒカルは互いの意思を確認しながらぼそりと呟いた。

『「妖怪が幽霊怖がるなよ……」』

その６　『荷物を運ぼう』（後書き）

妖怪だって、怖いものは怖いのです。ちなみに、妖怪女子不人気幽霊ナンバーワンは清兵衛さん。頭から血を流していて怖い、が理由だそうです。このあと、結局うやむやになって、心霊写真の件と引っ越しの件は軽く流れる事になりましたとさ。真の幽霊見えちゃう体質発覚は持ち越し。

あと、シャルルは買い物から帰ってきた真が封印を思い出して解放しました。封印から三時間後のお話です。

次回は再び住人紹介の予定。現時点の住人全員が出揃ったら、ちらほら学校のお話も登場予定。でも、メインはしあわせ荘です。

その7　『狐の真白さん』（前書き）

☆注意☆
この物語はフィクションですよ！実際の東京はこんな場所じゃないですから間に受けないでね♪

その7　『狐の真白さん』

その日中に荷物も整理し、引っ越しも一段落。引っ越しの挨拶も、その時にできる限りは終えて、ようやく落ち着いて部屋の真ん中に腰掛けて、ふうと息をつく真。

『学校はまだなのか？』

「あー。まだだなあ。いつだったっけ……まあ、いいや」

引っ越しの疲れと、アパートの住人の相手の疲れ、その両方でぐでんと真は床に伏した。荷物運び完了後、なんとか心霊写真アルバムを取り上げた真だったが、今度はリンさん、まさかの「手伝いしたから小遣いよこせ」発言である。

半ばカツアゲ。きっこさんの目を盗んでの犯行は、瓜子さんの密告により終了したが、しつこく絡みつくリンさんはとても相手するのが疲れたという。真の中で、リンさんが高校生に集る駄目人間（妖怪だけど）に確定した瞬間である。

「明日以降まだ挨拶してない部屋も回って～……」

『あのパツキンのパイオツカイデーのチャンネーの所か！』

「お前、ちょっと三途の川渡ってこい」

『ごめんなさい。だから、御祓いしようとしないでください』

ヒカルの悪ノリに御札で釘を刺しつつ、真はすくっと立ち上がる。

『お、どした？』
「晩ご飯」
引っ越しの片付け完了後、しっかり夕食の買い物は済ませた真は、一人暮らし初めての自炊に取り掛かる。とはいえ、元々料理は自分がしていた事もあって、特に難しい事もなかった。既に炊き始めている米の炊きあがりの時間に合わせて、真は動き出す。

ぴんぽーん。

その時、まるでタイミングを見計らったかのように、インターホンの音が鳴り響く。

「なんだリンさんが夕飯でもたかりに来たか」

リンさん株大暴落である。真は嫌々ながら、それに応える事にした。

「はい」
『おお、夜分にすまんの。２０２の金剛と申す者じゃ。ちと、挨拶に来た』
「あ、はい。今開けますんで」

金剛。２０２号室の住人。ああ、と真は思い出す。

『おお！　あの金髪美人！』

ヒカルが真にしか聞こえない声を上げた。アパートに来たときすれ違った、金髪に色白肌、何故か巫女服を着た美人。きっこさんにはしろさんと呼ばれていた人だ。
向こうから挨拶しにくるとは、少し驚きながらも真は急いで玄関に向かい、鍵を開けた。

ぎい。

そこにはやはり、あの時の金髪美人が立っていた。今度はやはり巫女服だが、上からは半纏を羽織っている。口元をきゅっと釣り上げ、悪戯な笑顔を浮かべて、女性、真白さんはすっとドアに手を掛けた。

「悪いの。図々しいのは承知じゃが、ちと上げてくれんかの？　手土産もある。話もしたい。勿論、ぬしが構わんかったらでよいが」
「あ、構いませんよ。どうぞ」
「おおう、すまんな」

真白さんは片手に包みをぶら下げて、ずいずいと中に押し入ってきた。ひょいとサンダル（下駄でも履いてるかと思った）を脱ぎ捨てて、途中部屋を覗きながら進んでいく。あれだ、妖怪は図々しいのがデフォルトなのだろうか。

「なんじゃ、飯はまだかね」

そんなお婆ちゃんみたいな事を言われても、と真、心中で苦笑い。リンさんじゃないけれど、たかりに来た人というのは正解だったようだ。

「これから作るんです」
「そか。じゃ、ちと待つかの」

たかる気満々のようだ。どうしたものか、一人分しか買い物してきていないのに。真は悩んだ末に、仕方がなくメニューを変更、明日の材料も使いつつ、二人分を作れるものを作ることにした。

料理を開始する真。すると、真白さんはテレビのリモコンを弄りながら、話し始める。

「主、人間か？」
「ええ、まあ。真白さんは妖怪ですか？」
「おお、そうじゃ。『白面金毛九尾狐（はくめんこんもうきゅうびのきつね）』。ま、主等には、『九尾の狐』と言えば分かりやすいかの？」

九尾の狐、何かと出てくるすごい妖怪。真も流石にちらっと聞いたことはある。

「あれですよね？　尻尾九本ある狐ですよね？」
「そうじゃ。まぁ、尻尾なんぞ何本にもできるがの。化け狐でも最強と謂われる凄い妖怪なのじゃ。えっへん」
「それはすごい」
「ほっほ！　そうじゃろ！」

嬉しそうに包みを解きながら、真白さんは鼻歌を歌い始めた。本当に嬉しそうだ。貫禄がない。包みの中身はタッパー。その中身までは台所の真には分からない。ぱかっとタッパーを開きながら、真白さんは台所で野菜を切る真の顔を見た。

「人間……人間か。ええの。ええの」
「どうしました？　何がいいんです？」

「ん。わしゃ、人間ってもんを好いとってな。恋しくて恋しくて堪らんのじゃ」
「え？」

きょとん、とする真。九尾の狐の真白さんは、にまっと悪い笑顔を浮かべて真の目を見た。

「……と、いうのも……昔愛した男の事を思い出すからなのじゃがな。おなごでもない主には、わしの『こいばな』など興味はないじゃろが」
「へーキョウミアルナー」

社交辞令である。真はここで乗っからない程空気は読めなくない。真白さん、多分話したくて仕方がないのだろう。ちらっ、ちらっと真の顔を見ていた。そして、興味ある（棒読み）と来た途端、ぱぁっと表情を明るくした。

分かりやすい大妖怪である。

「そか！　そか！　興味があるなら仕方あるまいっ！　仕方ないやつじゃの！　ええと、まとこ！」
「まことです」

どういう間違え方なのだろうか。本当にこの人、大妖怪なのだろうか。あ、人じゃなかった、妖怪だ。

「其れはわしがまだ人間との交わりを持たぬ……多くの妖怪達に恐れられて、ひとりぼっちだった頃の事じゃった……」

昔語り入った。

「ある日、わしはとある神社に出向いたのじゃ。そこでわしは、ひとりの人間に出会うた」

真はとんとん肉を切りながら聞き流す。

「そして、わしは恋に落ちた」

「早っ」

重要な場面全カットである。

「その時、わしはその正体になかなか気付けなくての。腹がぐるぐるとなって、むずむずして、男を見つめていると、じゅるじゅるとよだれが止まらなくなったのじゃ」

あれ？　何かおかしくない？　腹？　真は思った。あ、ご飯が炊けたようだ。

「男の匂いにくらっとして、どうしてもこの腹のドキドキを抑えきれなくなっての。この気持ちはなんじゃろな、と知り合いのタヌキに尋ねたのじゃ。そしたらタヌキはいいよった。『それ、恋じゃね？』と」

知り合いにタヌキがいるのか。……いや、問題はそこではない。フライパンを準備。今日は野菜炒めだ。

「わしは男と会話を交わし続け、その度にどきどきしての。次第にそのよだれを抑えきれなくなってきたのじゃ」

なぜ、よだれ？　調味料を出して置く。

「……しかし、その苦しい感情も、男が度々くれる油揚げを食べる事により、緩和されとった」

恋って油揚げ食ったらおさまるものなのか？　さぁ、炒め始めるぞ。

「それ以来、わしにとって、油揚げというものは、忘れられない恋の味となった……というわけじゃ」

タッパーから取り出した稲荷寿司をもごもごと頬張りながら、真白さんはにっこり笑った。

「ほれ。主を見たときから収まらなかった『どきどき』が、この通り収まったぞ！」

それってもしかして……

野菜と肉を、味付けしながら炒めながら、真は嫌な予感。

「……おおう。いい匂いじゃの。なんだか腹がどきどきしてきたぞ。これも……恋、かの？」

炒め終わった。これにて野菜炒め二人分完成。皿に盛りつけ、ご飯の準備だ。

……それってもしかして、腹減ってただけじゃないですか？

「九尾の狐って人食べますかね？」

「人？　ああ、基本肉食じゃて。食う奴は食うじゃろ」
『真。残念だが確定的だ』

成程、この人は、お腹が空いた状態で人を見て、食べたくてお腹がどきどきしてたのか。だから油揚げを貰って食欲満たすとそれがおさまった、と。そうか、成程……

あれ？　滅茶苦茶危なくないですか？

「……野菜炒め、二人分作ったんですけど、食べてきます？」
「おおっ！　ありがたや！　いただいていくぞ！」

真白さんは、ぱぁっと笑って手を叩いた。

「ご飯は大盛りでの！　あ、まこと！　お前にもお稲荷さんを分けてやろう！」

真は、真白さんにたかられる事を覚悟した。だって、食べられたくないものね。

その7　『狐の真白さん』（後書き）

～本日の現代妖怪辞典～
【白面金毛九尾狐（はくめんこんもうきゅうびのきつね）】
『九尾の狐』とも呼ばれる言わずと知れた大妖怪。その妖力は、現代でもトップクラス。変幻自在の妖怪です。油揚げや稲荷寿司が大好きらしいです。結構小食ですね。現代では人間社会の拡大に合わせ、人間に好まれる姿に化けて、人間社会に溶け込んでいます。流石は化け狐、その多くは人間を魅了しそれなりの地位を確立しているようです。外見でなく中身が重要、人間がそう思えない限り、彼らの社会支配は続くでしょう。現実は残酷です。

※これは現代妖怪辞典です。実在の妖怪とは何ら関係はありません。本当の九尾の狐はこんなんじゃないよ！

九尾の狐、アパート最長老で最高位の大妖怪、金剛真白さん。人間に恋する不思議な化け狐です。デフォルト衣装は巫女装束、金髪色白のべっぴんさん。スタイル抜群モテモテです。年齢の事は聞いちゃいけない。
格下タヌキに化かされちゃう、ちょっぴりお茶目な大妖怪です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0957x/

しあわせ荘の日常

2011年11月13日00時44分発行